環境リスク研究分野（総合）

委員会からの主要意見
現状についての評価・質問等
○精度や信頼性が高いと判断される多様な化学物質に係るリスク評価に寄与する研究成果が蓄積されている。[年度] ○データ整備やレファレンスラボラトリーとしての機能は他機関ではできないものであり、今後も充実させて欲しい。[年度] ○第 3 期中期計画で示した目標や方向性に答える形での成果の示し方はできないか。[年度・見込み]
今後への期待など
○リスク認知や行動研究といった社会科学的課題に取り組むのであれば、十分な態勢と準備を行い、その分野の司令塔としての役割を担って欲しい。[年度・見込み] ○伝統的なリスク研究に対する着実な個別研究も引き続き期待したい。まずは基準化への貢献、そして複合曝露への評価を実施して欲しい。[見込み] ○これまでに蓄積してきたリスク評価に関する研究成果を合理的かつ効果的に活用する方途、すなわちリスクの評価結果を社会に還元し、実装するための学術に裏打ちされた方法論へ展開することが強く期待される。[年度]

主要意見に対する国環研の考え方
① 化学物質のリスク評価については、環境施策への貢献を意図しつつ、学術的基礎に依拠した信頼性の高い研究に注力してまいりましたが、今後ともその努力を継続いたします。 ② データベースやレファレンスラボラトリーなどの環境研究の基盤整備は国環研の強みであり、さらにニーズを把握しつつ充実するようにいたします。 ③ 第3期中期計画の目標と成果の対比を明確にするようにいたします。また、環境施策への貢献については、担当部局との情報交換をさらに進め成果を上げるようにいたします。 ④ 認知や行動の研究はリスク研究の中でも新規性の高い分野と認識しております。生活者を意識し、また環境保全の考えを進めるリスク研究となるように努めてまいります。 ⑤ 基準策定に向けた調査・研究は環境リスク研究センターの重要な役割と考えており、今後とも注力してまいります。実環境からの化学物質曝露は実質的にすべて複合曝露であると認識しており、わが国の実態に即した複合曝露評価の方法論を提示できるよう研究を進めてまいります。 ⑥ 蓄積した成果を社会に実装することは国環研に求められている課題であり、実社会の中で活用できる方法論や成果を示すべく研究を進めてまいります。